Newsletter
2018 | 春 | 特定非営利活動法人ジェン Vol.71

JEN
Japan Emergency NGO

すぐそこは、いまだ地雷が残る草原です。ここに留まる理由は、農業で故郷に活気をもたらしたい、という強い想いがあるからです。
（ムライティブ県オスィヤマライ地区、ヤング・ファーマーズ・ソサエティの仲間たち）

農業研修を受けてみませんか

内戦の間避難生活を繰り返し
ようやく戻った故郷は、
ジャングルと化していました。
何から始めればよいかわからず、
途方に暮れていました。

ＪＥＮがやってきた、あの日。
私は、ＪＥＮが与えてくれたチャンスに
賭けてみよう、と思いました。

これがやがて私や村人の希望となり
村全体の大きな目標になりました。

ムライティブ県オスィヤマライ地区の村長
写真前列左から２番目

特集：スリランカ

～14年間にわたるご支援を、ありがとうございました～

スリランカでの活動を終了しました

3. 農作物の生産性向上を目指して。牛糞をつかった有機肥料の作り方を学ぶ人たち（ムライティブ県、2017 年）**4.** 地域、文化に適する苗や種を配布しました。収穫が待ち遠しい。（パティカロア県、2009 年）**5.** ワークショップの参加者同士、アイスブレイクやチームビルディングも大切です。（パティカロア県、2010 年）**6.** 津波に被災した児童を対象に、課外活動を行いました。（ハンバントタ県、2007 年）

1. 再定住地区でココナッツロープづくりのワークショップを開催しました。（ハンバントタ県、2006 年）
2. 講座で習った「たい肥の作り方」をさっそく実践。完成した有機たい肥は、農協を通して販売しました。（パティカロア県、2010 年）

1980年代に始まった内戦が収まらない中、2004年の暮れにスマトラ沖大地震及びインド洋津波が発生しスリランカを直撃しました。直後より、JENは支援活動を開始。それ以来、ニーズに合わせて活動地を移し、各地で支援を実施しました。今、人びとは、自分たちで進む力を取り戻し、新しい人生を歩み始めています。

より良い明日をつくる

人びとの強い願い―。それは「ふたたび安心した暮らしを送りたい」ということ。JENはその願いを全力で支えてきました。

紛争後の荒れ果てた故郷に戻った人びとは、JENと共に水を確保し、耕し、苗を植え、種を撒く、この地道な作業をあきらめることなく取り組み、広大な農地を再び自分たちの力で蘇らせました。また、コミュニティの再建を目指した農協の活動では、人びとは積極的に参加し、農作物の生産量を増やす努力を続け、更には商品を開発するなど、果敢に新しい挑戦を続けました。近年深刻化する気候変動による干ばつ被害への対策として行った節水プロジェクトには、地域の子どもを含む200人以上が参加しました。「より良い明日をつくる」という共通の目標が地域全体に広がったことこそが、復興にむけた力になりました。

コミュニティの力を信じて

深い悲しみを負った時、人と人とのつながりは深い悲しみを解放し、再び前を向いて希望を語ることができる原動力となります。JENはその環境づくりを大切にし、特にコミュニティの再建に心を砕いてきました。その活動が実を結び、今、彼らはコミュニティの力を最大限に活かしながら、助け合い、高め合い、次々と身近な課題を解決し、昨日よりも今日、今日よりも明日、と少しずつ前に進み始めています。スリランカでの活動は、現地政府の協力、決してあきらめない、という現地スタッフの努力と根気、そしてJENのサポーターの皆さまからの温かい応援なしでは、到底なしえなかったことでした。改めて、14年間にわたるご皆さまの支援、本当にありがとうございました。

VOICE スタッフの声

ＪＥＮで働いた８年間は、
私にとって人生の大切な１ページです

スリランカ事務所　経理アシスタント
アパルナさん

JEN スリランカのスタッフと。
左から３番目がアパルナさん。

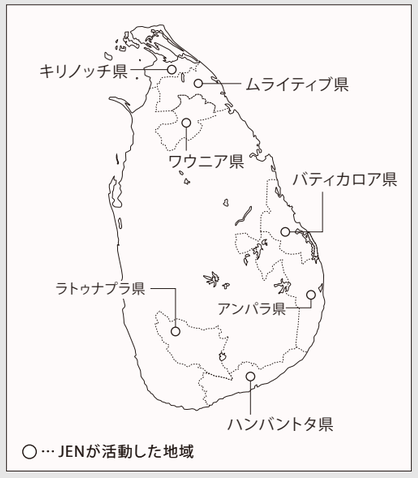
私は2010年にコロンボのスリランカ事務所で働き始めました。駐在する国際スタッフが昼夜を問わず机に向き合う姿や、フィールドに駆け付け、現地スタッフと協力し合う姿を見ながら過ごしてきた８年間。常に新しいことを学ぶことができる場所でした。

最初は内気だった私も、一緒に働くうちにコミュニケーションの取り方や、問題を解決する方法などが身についてきました。国際スタッフも私を信頼してくれて、自主的に仕事を進める「自由」を与えてくれました。

2017年は、私にとって忘れられない一年になりました。５月に南西部で発生した大洪水と地滑りの緊急支援で、プロジェクトの実施に携わることができたのです。それまではコロンボでの経理補佐の仕事しか知りませんでしたが、緊急支援の現場で起こっている現実やニーズを見極める術を同僚から学びました。また、厳しいスケジュールの中での仕事の進め方も学びました。

ここで働いた８年間は、私の人生のかけがえのない一章になりました。わたしは、ＪＥＮがスリランカの復興に14年もの間貢献してくれたことに感謝するとともに、これからも世界中のより厳しい状況におかれた人びとのために支援活動を続けていってほしいと願っています。

7. 心のケアの活動では魚網編みワークショップを開催しました。（パティカロア県　2007 年）**8.** 洪水被災者への緊急支援物資配布では、シェルター資材を配布しました（ラトゥナプラ県　2017 年）



○面積：6万5,607平方キロメートル（北海道の約0.8倍）○人口：約2,103万人
○首都：スリ・ジャヤワルダナプラ・コッテ ○民族：シンハラ人（74.9%）、タミル人（15.3%）、スリランカ・ムーア人（9.3%）（一部地域を除く値）（外務省HPより）

1948年	英連邦内の自治領として独立
1956年	シンハラ・オンリー政策
1972年	英自治領からの完全独立
1975年	「タミル・イーラム解放の虎(LTTE)」設立
1983年	第一次イーラム戦争勃発
1987年	政府軍による北部ジャフナでの大規模な戦闘開始
	インド介入「インド・スリランカ和平協定」調印
1990年	再び政府軍とLTTEが衝突
	第二次イーラム戦争勃発
2002年	ノルウェー介入 無期限停戦合意
2004年	スマトラ沖大地震及びインド洋津波発生
	北西部を除く全ての沿岸が被災 犠牲者３万人以上
2006年	再び戦闘激化
2007年	政府は東部をLTTE より解放
2009年	政府軍は北部LTTE 支配地域を奪取 内戦終結
2012年	北部国内避難民キャンプ閉鎖
2015年	大統領選挙 シリセーナ大統領就任
	統一国民党(UNP)政権樹立
2017年	大洪水により南西部が被災　犠牲者212人

2004年 津波被災者緊急支援に向けた初動調査を開始
2005年～2007年 南部津波被災者支援
2007年～2011年 東部帰還民緊急・復興支援（バティカロア県、アンパラ県）
2009年 北部緊急支援 初動調査を開始
2010年～2017年 北部避難民・帰還民復興支援（ワウニア県、ムライティブ県、キリノッチ県）
2017年 南西部洪水 被災者緊急支援（ラトゥナプラ県）
2017年12月31日 スリランカでの支援活動を終了

＝JEN活動

特集：パキスタン

活気溢れる故郷を、ふたたび
―若者たちの新たな挑戦―

1. 地域の人びとからミルクを回収するワリさん。回収されたミルクは、地元のお店が販売します。 2.自宅の一角に構えた作業場で。服を仕立て生計を助けています。 3. ワリさんの親戚が所有する農地。小麦やトウモロコシを育てます。

厳しい避難生活を乗り越えて

「なぜ私たちが故郷を追われなければならないのか、どれほど考えても納得できませんでした」。

5年間の避難生活について、ワリ・ムハンマド・アフリディさん（21歳、以下敬称略）は、こう振り返ります。「避難生活は本当につらくて、時に言葉にならないほどの寂しさを伴うものでした。出来ることといえば、『きっと、また戻れる』と信じ、祈ることのみでした」。

ワリは三年前、首都イスラマバードから西に150㎞程に位置する故郷、トゥート・タラブ村に戻りました。17歳での結婚は少し早かったと時々感じつつも、愛する一歳と三歳の息子、そして家族や親戚、総勢30人の大家族で支え合いながら暮らしています。

故郷トゥート・タラブ村は、掃討作戦によって、すっかり姿を変えていました。何もかもが壊され荒れ果てていたのです。「故郷に帰ることはできました。でも、私たちは家、商売、学校、生活の全てを立て直さなければならないのです」。一家は元々兼業農家でした。農業・畜産業などで生計を立てつつ、ワリは服の仕立屋に勤め、慎ましくも不自由なく暮らしていました。しかし、避難生活の間に状況は一転しました。手元に残ったたった二頭の牛からとれるミルクは、家族で分け合うと底をつくため販売できず、貴重な収入源をも失ってしまいました。

故郷のために

困窮した生活をなんとか改善したい、少しでも家計の助けになればと、ワリは昨年からＪＥＮがサポートするユースグループの一員になりました。これは、畜産の活動に参加している人を対象にしたミルクの販売活動をサポートするグループです。復興の情熱に溢れる20名の若者が参加しています。彼らは、地域の市場でミルクを販売するために、日々市場と生産者との関係構築に尽力しています。

この新しい仕事が私たちの希望

ワリは起業に関する研修の受講を終えた後、仕事の空き時間を使ってミルクの回収や販売サポートに携わっています。「副収入で裁縫用の糸やボタンを買い足せるようになりました。いつの日か自宅作業場のリフォームもしたいです。仲間たちは、ミルクの販売を今後もっと大規模な事業にしたいんだ、と話しています。この新しい仕事が、私や周りの人びとの希望です」。ＪＥＮは、このユースグループの活躍が、地域コミュニティの活性化につながり、今よりも、コミュニティや若者が、未来への希望を描けるようになることを願っています。

背景

アフガニスタン・パキスタンの国境沿いに位置する連邦直轄部族地域（以下ＦＡＴＡ）では、２００８年以降の政府による武装勢力掃討作戦により、大量の避難民が発生しました。掃討作戦の終わった地域にはこれまでに３５５万人を超える人びとが帰還を果たしましたが、帰還先の生活環境は厳しいもので、生活の安定が大きな課題となっています。また、現在も約１６万人の人びとがＦＡＴＡへの帰還を待っており、避難先での生活を強いられています。

＊出典…ＦＤＭＡ（FATA Disaster Management Authority）2017年末時点

パキスタン・帰還民支援　ー畜産分野ー　概要

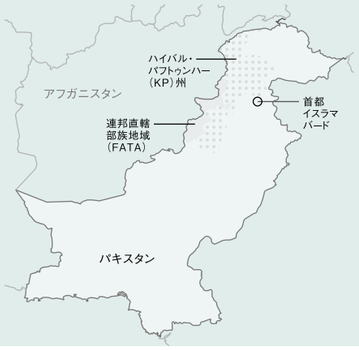
ＪＥＮは、パキスタンの北西、アフガニスタンと国境を接する連邦直轄部族地域（ＦＡＴＡ）において、帰還民を対象に畜産支援を実施。乳牛・栄養価の高い牧草の配布、予防接種、ダニ駆除、クリミア・コンゴ熱の予防措置と同時に、家畜の健康維持や栄養改善の大切さを学ぶ研修を提供しました。多く搾乳できるようになれば、世帯の収入にもつながります。そこで、パキスタンの固有品種である「アチャイ種」と、搾乳効率の良い「ジャージー種」との人工授精による交配を地域の畜産局の協力を得て行いました。

VOICE

毎日３リットルの牛乳が搾れ、助かっています。

シャイスタさん

「ＪＥＮから受け取った牛から１日に３リットルほどの牛乳を搾り、そのうち２リットルほどは、子ども達が飲んだり、ヨーグルトやバターを作ったり、と家族で消費しています。残りを近所で販売すると、100ルピー（約100円）ほどの収入になります。生活は厳しいですが、この売り上げを貯金しています」。



パキスタン・イスラム共和国

○面積：79.6万平方キロメートル（日本の約2倍）
○人口：1億9,540万人
○首都：イスラマバード
○民族：パンジャブ人，シンド人，パシュトゥーン人，バローチ人
○言語：ウルドゥー語（国語），英語（公用語）
○識字率：60%（10歳以上を対象）
○宗教：イスラム教（国教）
（外務省HPより）